

やまととの名品

天理図書館



一
師範を參上され又依てたゞ
まをはか處をいとくと
おもてた
和の道の心安らぎやうで
は難き方といふとと
じます。いろへく國りて傍まで
いともひざいすなが様
もはれずで遠慮いた
うた。後後新き席生はれ

たにさきじゅんいちろう
谷崎潤一郎書簡 (根津松子宛)

昭和5年(1930)8月16日付 3枚

各縦24cm 横34cm

天理図書館
谷崎潤一郎書簡

東京・日本橋に生まれた谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）は、関東大震災後に関西へ妻・千代らを連れて移り住みます。新天地で一から作家生活をやり直そうとする彼を支援したのが、大阪の豪商・根津清太郎で、宛名の「根津御奥様」とは、この清太郎の夫人・松子です。彼らは、家族ぐるみの付き合いをしていました。

本書簡が書かれたのは、「佐藤新夫婦」「家を佐藤に明け渡す」などの文面から、谷崎が、昭和五年（一九三〇）に千代をめぐつて佐藤春夫と起こした「細君譲渡事件」の直前と推定できます。

まず谷崎は松子へ、突然に家族の醜態を知らせて驚かせたことを詫び、次に、四十四歳で無妻となつた寂しさをしんみりと語り伝えて「女中ばかりでなく御嫁さんも御心がけ」をと哀願。さらに、今後も上方で暮らすつもりでおり「御宅様より外は御すがり申すところもなく」と、文豪はすっかり頼りきつた態度を見せます。

不安定な夫婦生活が続く中、年の一月に出版された、千葉俊二編『谷崎潤一郎の恋文—松子・重子姉妹との書簡集』（中央公論新社）では、この手紙が松子宛書簡の巻頭を飾っています。

（天理図書館 倉石 実）

